

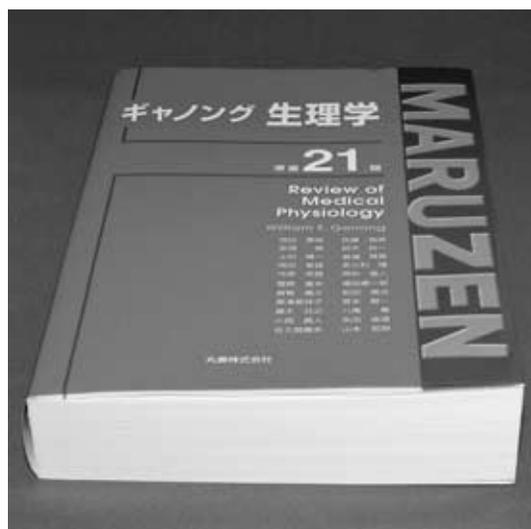
# BOOK REVIEW

## ギャノン生理学書評

高橋國太郎 (明治薬科大学 病態生理)

現在では、極めて珍しい単著者による人体生理学の教科書である。基本的な各器官の生理機能に関する懇切な説明は、この教科書が、医療に携わる人に真に役立つ理解を第一の目的としたことを明白に物語っている。また、すべての生理学の分野にわたるバランスのとれた記述は著者が一人という特徴が十分に生きている。特に、臨床における疾患の病態生理学的理解につながることを目指した記述は、独特のもので、この教科書が単なる人体生理学だけではなく、誠に医科生理学であることと対応する。

ところで、最近の総合的医療におけるパラメディカルな分野の役割が大きく、不可欠な時代となった。特に、私が関係した薬学の領域では、医薬分業の浸透、服薬指導を含む実際の臨床の場における活躍への期待、医療の最前線としての薬局の役割、薬害における人体への病理的影響の正確な指摘など、多くのものが薬剤師に社会的に求められる時代となった。従って、薬学教育の場においても、医科生理学とくに病態生理学の基本的理解なくしては、薬学を修得したという資格を問われる時代となった。それがまた、今、話題となっている薬学教育6年制の実施とも関連している。おそらく、他のパラメディカル分野、看護師については言うまでもなく、臨床検査技師、各種のリハビリテーションにかかわる人々など領域についても、同じ事情が言えるのではないかと思う。特に、医学の外にでて、あらためて生理学的理解の必要性と大切さ、またわかって貰うことの難しさを感じている。



このような時期に、ギャノン生理学は最新の分子生物学、分子遺伝学の知識を含みながら、丁寧でかつ医師以外でも理解可能な平易な説明、理解をたすける多数の図版が有る特異的な教科書である。しかも、パラメディカルの初年級の講義としてはやや大部と思われるが、卒業までの専門的勉学に充分耐えられる内容を適切な頁数に納めてあることは素晴らしい。ただ、特定の分野、例えば電気生理学などの2、3の部分については、説明が分かり易く、間違いはないが、専門的立場からは付け加えを必要とすると思われるところもある。これについては、翻訳にあたった新進気鋭の生理学者の優れて適切な訳注があり、それも特色となっている。